

ご質問への回答(2019年12月14日FDフォーラム)

講演: 関西大学教授 森朋子への質問			
No	質問内容	回答者	回答
1	高校生に興味関心のあることを深めて欲しいと思う。しかし、それほど強い関心や問題意識を持つ高校生が多いとは言えない現状があるのではないかと。学校の中だけでは、社会への関心を向けるのが難しいのではないかと。そのためにはもっと社会に出るような取り組みが求められると思う。このあたり、森先生はどうお考えでしょうか？社会と連携して実施している高校における良い教育実践などがあれば教えてもらいたいです。また、そうした社会との連携を高校でする際に、配慮すべきことや、学習課題の設定方法について教えて貰いたいです。	(関西大学) 森朋子	トークセッションで扱いましたので割愛します。
2	「探究学習により従来の学力検査による、見える学力も向上する」→文科省出処の資料のようですが、「探究学習にそれなりに取り組むことができる」高校は「従来型学力検査においてもそれなりに高い結果が既に出ている」高校、ということではないでしょうか？	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。文科省の学力調査の結果をどのように読むかは難しい問題です。ただ習得→活用→探究の順で学習は必ずしも発達しない、特に分野においてはその逆もあり得るということをお伝えしたいです。
3	探求から習得へ、ということ、共感しました。これはPBL ProblemsBasedLearningと流れとしては同じだと思ったのですが、探求学習＝pbl学習と思って良いのでしょうか？	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。私自身は探究活動は、自身の問いがなければ期待した効果はあまりないと思っています。PBLに限らず、方法はディスカッションでもワークでもなんでもよいと思いますが、自身で問いを立て、議論や調査の中でそれらがゆらぎ、もう一度考え直す、といったプロセスが重要だと考えます。
4	探求の時に課題設定をするのが大切だということをよく理解できます。しかし生徒は現状に満足していることが多く、それが難しいのですが、みずから学生が課題を感じられるように、どういう配慮を教員がすれば良いのでしょうか？あるいは、課題を設定したとしても、すぐに溶けてしまう課題、学びに結びつかない課題、というのがあります。こうしたことを考えると、やはり学びが深まるテーマをいくつか教員から提示したほうが探求につながるのではないかと考えています。いかがでしょうか？たとえば、教員も含めて、複数の課題をだして、皆で議論しながら1つにしていくとかがよいのでしょうか？	(関西大学) 森朋子	トークセッションで扱いましたので割愛します。
5	3要素の統合をするような探求をさせようとする、やはり課題の設定が重要だと思います。それを生徒がするのは無理があるのでは？と不安に思います。どう思いますか？	(関西大学) 森朋子	トークセッションで扱いましたので割愛します。
6	現在、学生が自分自身の学習成果について自らの言葉で説明できるようにすることが求められているかと思っています。そのためには、見えにくい力や見えにくい力についても、なんらかの形で可視化する必要があると思いますが、どのような方法で可視化することができるのでしょうか。	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。ここは教学マネジメント特別委員会でも議論になっていたところです。私自身が最近の中でよいと思う方法に、ショーケースポートフォリオというものがあります。「学習者自身が選んだベストワークのポートフォリオ」と定義されます。医療界で広まっているようです。これならエビデンスをもって自身の資質・能力の説明が可能だと思います。
7	探究→知識習得の方が定着率が高いというデータがある、ということでしたが、出典を教えてください。その時の知識とは、普遍的な何かでしょうか。	(関西大学) 森朋子	「Time for telling」(Schwartz & Bransford, 1998)をお目通しください。また拙文で恐縮ですが、『アクティブラーニング型授業としての反転授業』(森、溝上 2017)の中でも論じています。
8	所属先の大学で、知識伝達だけでは本質的な問題の理解につながらないので、少しずつ「見えにくい学力」から下の要素を意識した授業の工夫をしております。しかし知識伝達以外の要素を少しでも出す授業を行うと、早々に履修取消をしたりドロップアウトしたりする学生が急増してしまいます。一部の学生は意欲的でよく考えながら授業に取り組むのですが、大学教務からも「IR的な見栄えが悪いのでドロップアウト率を抑えられるよう、知識伝達を中心とした授業にして欲しい」と強く要請されたりします。このような立場で「見えにくい学力」に関する工夫を授業の中でうまく組み入れるには、具体的にどのような工夫が必要でしょうか。	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。本当にこの問題、難しいですね。そもそも学生が大学で学ぶことの意義が見失われているのではないかといつも悲しい思いがします。私がいつも思うのは、学びの主体である学生が、目の前の面倒さをいつも回避するだけでこの活動の意義を理解できていないということです。社会に大学の授業や今やっていることがどのように繋がるのか、常に意識してもらえたらいいですね。
9	ライティングは大学が引き受け、高校の段階ではプレゼンテーションを行うとありましたが、そのあたりのまさに「接続」の方法をどのようにご検討されているのでしょうか。	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。残念ながら関大もできていませんが、ここはやはり学校法人として併設校と大学との連携を強化するべきであると思っています。成功事例が出れば、それに続く学校もでてくるはずですよ。
10	プレゼンテーション(の資料作成)においても、レポート同様にライティングとしての指導は可能/必要だと思います。	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。ご指摘ももっともです。ロジック・プレゼンテーションが必須です。

11	茨城県の私立茗溪学園などは非常に本格的な探求学習をとおしてライティングまで行っています。また、現在大学の新生に高校までの文章作成に関する学習履歴の調査を行っていますが、必ずしも国語に偏っている印象はありません。国語が担っているというのはデータがあるのでしょうか。	(関西大学) 森朋子	トークセッションで扱いましたので割愛します。
12	生徒が評価に向かって学んでいく。ゆえに評価を変えなければならないという結論でしたが、結局主体的な学習者の姿勢が欠落してしまうように感じます。その生徒の発想自体を変えなければいけないと思いましたが、いかがでしょうか。	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。習得・活用部分と探究では問いを誰が立てるか、ところが大きく違います。習得・活用部分では、教員が問いを立てることになりますが、その際に〇×のみではなく、より「見えにくい学力」を活用するような設問を立てることが時には必要です。すべて学習者の主体性に任せることは難しく、だからこそカリキュラムで双方を担保するのではないかと考えます。

事例報告: 報告者への質問			
No	質問内容	回答者	回答
13	卒論、マスター論文などの支援はされないのでしょうか？	(津田塾大学) 飯野朋美氏	割合として多くはありませんが、相談は受けています。卒論・修論については学生は基本的には担当教員の指導を受けていますが、担当教員からの指示・助言によりセンターを利用する学生もいます。
14	英語でのライティング支援と日本語でのライティング支援で何か違いがあるのでしょうか？英語だと、日本語で言うてにをはの修正も必要となり、ある程度、添削的な要素も入ってくるような気がするのですが、どうでしょうか？	(津田塾大学) 飯野朋美氏	トークセッションで扱いましたので割愛します。
15	以前は教員ではないチューターも指導にあたられていたかと思いますが、現在は在籍されていないのでしょうか。よろしければ、その理由と支援活動への影響の有無を教えてください。	(津田塾大学) 飯野朋美氏	関西大学との「大学間連携共同教育推進事業」取組期間中には、大学院博士課程在籍のチューターを雇用していました。もともと大学院生の数が少ないこと、またライティングセンター運営の経済的事情から、現在は特任教員および非常勤教員のみが担当しています。院生チューターは多い時点で3人いましたので、相談枠を減らさざるを得ないという点で影響がありました。
16	資料検索などをアドバイスされるときには、図書館との連携はどのようにされていますか？	(津田塾大学) 飯野朋美氏	とくに連携しているということではありませんが、不明な点は図書館スタッフに尋ねるよう伝えていきます。
17	2018年度に比べ、増えたとはいえ、レポートに関するライティングセンターの利用件数は2019年上期で全学生数の80分の1程度に思えます。つまりは、大部分の津田塾大学生は、問題なくレポート作成に取り組んでいるということでしょうか？	(津田塾大学) 飯野朋美氏	問題なくレポートが書ける学生が多いとも言えません。利用件数については、相談枠の開設数との関係で考えると、枠が少なく予約ができない学生がいると思われます。また、締切ギリギリになってでは相談を利用する余裕もないということもあります。ライティングセンターの利用を思いつかない学生もいるようです。3年生、4年生になって初めてセンターを利用し、「もっと早く来ればよかった」という声をよく聞きます。
18	「書けそう」と思える状態から、「書きたい」と積極的に思える状態になるようライティングの意欲を引き出すためにはどのような支援が必要だとお考えでしょうか。	(津田塾大学) 飯野朋美氏	以前、就職関連の論文試験対策に何回も通ってきた学生が、徐々に「『書くこと』に自信を持てるようになった」と言って、最終的に試験でも満足する論文が書けたということがありました。「書くこと」のなかには、アウトラインを考える、適切な例を用いるといったスキルが含まれます。レポートでも、あるテーマについて調べてレポートを書いたことから、さらに関心が深まり、その後の研究テーマにつながるということがあります。ライティングに必要な一つ一つのスキルを獲得できるように支援が必要だと思います。
19	就職指導関係も関わられているとのことですが、キャリアセンターとの連携はどのように行われていますか？	(津田塾大学) 飯野朋美氏	キャリアセンターとライティングセンターでは、文章を見る視点が多少異なっているかもしれませんが、とくに連携しているということはありませんが、学生たちは双方の特徴を捉え使い分けしているようです。
20	アメリカで大学を卒業した現高校英語教員です。アメリカでは大学1年時にWritingのコースが必修になっている大学がほぼ全てで、日本の大学ではそういうシステムがないことを知らず驚きました。そのような必修のライティングの授業の必要性は議論されたりしているのでしょうか。	(津田塾大学) 飯野朋美氏	アメリカの大学では、国語(英語)教育のみならず分野を超えてライティング教育が行われていますね。ライティング教育の長い伝統があります。日本ではライティング教育の「定型」というものがないことが、カリキュラムとしてシステム化されないことの大きな要因だと思われれます。初年次教育の一環としてライティング指導は行われていますが、どのような教育が必要かということの認識にも教員間でばらつきがあるように思います。

21	<p>素朴に考えると第二言語の英語のライティングの方が「第一言語ではないし文化的な背景も異なるので、何から書けばよいかわからない」という相談が多く、第一言語の日本語のライティングの方が「日本語ならば文章が書きやすいから書けるけど、内容に自信がないので見て欲しい」という相談が多くなるのではと思うのですが、その逆になってしまうのはなぜでしょうか。背景にある要因を知りたいです。</p>	<p>(津田塾大学) 飯野朋美氏</p>	<p>本学の事例に限って言えば、英語の相談に来る学生は、比較的英語の習熟度が高いことが多いからかもしれません。相談内容も、英語検定試験のライティング・セクションの練習や留学の応募書類が多くなっています。また、「書いた文章のチェックをしてもらうところ」という認識があるからかもしれません。日本語に関しては、「書くべきことがない(わからない)と書けない」という学生が多いのだと思います。</p>
22	<p>就職関連のライティング指導を行う場合に、業界への理解、企業研究などにおいて学生より上位の知識が必要だと思いますが十分な手当てとなっているのでしょうか？</p>	<p>(津田塾大学) 飯野朋美氏</p>	<p>ライティングセンターで見る文章は、おもに「志望動機」「学生時代に力を入れたこと」などですが、論理的であるか、伝わる文章か、自分らしさが出ているかといった点に注目しています。志望動機を書くには企業研究が必要ですが、それは学生がすべきことだと伝えています。エントリーシートを書くうえで必要な戦略的なことについては、キャリアセンターに相談するよう勧めています。</p>
23	<p>「高校ではあまり書くことについて指導されていない」に関する資料が、いずれも「2008 島田先生」「2010 渡辺先生」等、古いのではないのでしょうか？ 本に編集される時間も考慮すれば、それぞれ10年以上前の現状を基にされているように感じます。2018年、19年現在、10年前とさほど変わらない、という認識をお持ちになられる資料を提示くだされば幸いです。</p>	<p>(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘</p>	<p>ももとの原稿も見ていましたが、渡辺哲司、島田康行(2017)ライティングの高大接続-高校・大学で「書くこと」を教える人たちへ、ひつじ書房も参考にいたしました。ぜひご覧になってみてください。大学に入ってくる学習者の能力や彼らに対するヒアリングをもとに考えますと大きくは変わっていない印象は持っております。先生の大学ではいかがでしょうか？</p>
24	<p>「高大接続で考えるライティング力の涵養」というテーマに対し、大学での取り組み事例の報告に偏っているように思います。系列校との取り組みの具体的な内容はどのようなものだったのでしょうか(ルーブリックの内容など)。そうした報告などがあると、接続の具体的なイメージなどを抱きやすいかと思えます。現状までの報告は、ややテーマと乖離しているように思いますがいかがでしょうか。</p>	<p>(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘</p>	<p>本セッションは、森氏から高校の話、飯野氏、岩崎・多田から大学の話をし、その後のトークセッションでその接続を考えるという構成としておりました。これは最初の趣旨説明でお話した通りです。ですので、トークセッションで高大接続の可能性を探るようにいたしました。このご質問はトークセッション前に寄せられたものですね。事例報告では扱えず大変失礼しました。併設校との高大接続という観点でいうとこれからという印象を持っています。今年度はトライアルとして、北陽高校の高校生を対象にワークショップを実施いたします。ルーブリック等に関しては、報告書平成28年度分p108に掲載しています。ご関心あれば問い合わせフォームから連絡をいただき、ぜひご覧になってください。http://www.kansai-u.ac.jp/renkeigp/publication/index.html</p>
25	<p>高校までの段階で身につけておくべきライティングのスキルはどのようなものとお考えでしょうか。また、そうしたスキルを身につけさせるためにはどのような取り組みが必要でしょうか。</p>	<p>(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘</p>	<p>トークセッションで扱いましたので割愛します。</p>
26	<p>パンフレットに「訓練された大学院生のチューター」とありますが、どのようなチューター研修をされているのか(対面相談のため・オンライン相談のため)を伺いたい。</p>	<p>(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘</p>	<p>トークセッションで扱いましたので割愛します。</p>
27	<p>資料14に記載の相談件数は、どの年度のものでしょうか？ 他の資料には各年度が明記されていますが、資料14には見当たらないようです。</p>	<p>(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘</p>	<p>トークセッションで扱いましたので割愛します。</p>
28	<p>15枚目のスライドのデータをみると、1年生の春学期の相談と4年生の秋学期の相談が多い傾向が読み取れます。前者は大学でのライティングの勝手がわからない学生が多いから、後者は時期を考えると卒論がうまくまとめられずに相談を受けるケースが多そうな傾向が読み取れます。これは2015～2016のデータですが、たとえばこれを受けて対応のしかたを考えたり、その後相談件数の時期・学年による傾向が変わったりしたのでしょうか。</p>	<p>(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘</p>	<p>翌年度の春学期に向けて教授会において学習者の利用状況をフィードバックしており、教員からもライティング教育に活かしてもらおうようにしています。また躓きの多いテーマに関してはセミナー、教材で補うように心がけております。ただし、課題の提出時期や課題が出される授業科目に大きな変更がありませんので、大幅に利用傾向が変わるということは確認されていません。</p>
29	<p>相談に来た学生と来なかった学生では、正課授業の成績にも反映されてきているか？不公平感はないか？成績評価の厳密化にあたり対話プロセスで配慮しているか？ライティングチューターも研修等でその点指導しているか。</p>	<p>(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘</p>	<p>各教員の判断にゆだねています。ラボの取り組みはあくまでも学習支援であり、学習者が課題に思ったこと、達成したいことをゴールに設定しており、教員が設定したレポート課題を達成することと完全にイコールであるとは考えていないからです。研修でも扱います。</p>

30	学生が字数を埋めることのみで腐心するのは、授業課題が分量とテーマの規定くらいでなにを評価するかが示されていないケースが多いからというのがあると思います。各授業との連携で、教員に課題の出し方についての提言をされることはありますか。	(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘	躓いている事柄をランチョンセミナー(教員向けのFDセミナー)で扱って報告しておりました。ただ、どのような課題の出し方がよいのかに関しては、簡単に提案できることではないかと思っておりますので、担当の先生との対話を通して、引き続き考えていけるとよいなと思っています。
31	ライティング相談は基本、チューターの大学院生がやっているということでしょうか？	(関西大学) 岩崎千晶・多田泰紘	そうです。本学では博士課程後期課程・PDが中心となっています。一部アカデミックアドバイザーも担当します。

トークセッションでの質問			
No	質問内容	回答者	回答
32	高校英語教師です。英語指導において言語の壁もあり「探究」活動の難しさを感じています。教えるものが「言語」である特異性だと感じていますが、なにかご提案等ありましたらお願いします。	(関西大学) 森朋子	ご質問ありがとうございます。言語や技術など、そもそもパフォーマンスを伴うものの探究は難しいですね。アクティブラーニングが一番難しい教科だと思います。私は「英語【を】学ぶ」ところから「英語【で】学ぶ」に変化するところが探究かなと思っています。実際に海外の事例を当てるためには、現地語の情報が必須になりますね。
33	ライティング力をつける観点から、文学作品に触れることは重要でしょうか？	(関西大学) 森朋子	触れるということがどこまでをお考えになっているかによって、回答は異なる気がしますが、読む力をつけることは書くうえで必要だと思います。
	ルーブリックの扱いの難しいところは、学生にルーブリックを示してこれを目指し、としても「だいたいこんなもんだろう」と勝手に自分を高く評価する学生も数多い点にもあると思います(「能力が平均より低い学生ほど自分を高く見積もる傾向がある」というダニングクルーガー効果に近い状況)。ルーブリックの作り方にも問題があると思いますが、このような「理解が雑」な学生の対処も大学教員としては頭が痛いです。	(関西大学) 森朋子	そうですね。時間をかけて理解していただきたいですね。
34	高校教員です。確かな英語の文法力を育むことは大切かと思いますが、まずは英語で論文書いてみて、書けないから教えてほしい、もっと学びたいと思わせることも大切ではないかと思っています。これは英語に限った話ではなく、できることなら全領域でやってあげたいと思っています。	(津田塾大学) 飯野朋美氏	各高校の英語教育の目標や実践状況にもよるかと思いますが、大学生に英語で意見文を書かせても、まったく書けない学生がいる一方で、立派な論文が書ける高校生もいます。英語のライティングに関しては、一文一文がきちんと書けるということが基本かと思っています。様々な領域で「テーマを決めて、調べて、書く」という経験ができれば、英語論文のライティングにもよい影響がもたらされると思います。